

『エマ』におけるハリエットの
ジプシー遭遇事件の顛末をめぐって
—— 18世紀以後のイギリス文学における
ジプシー表象からのひとつの解釈 ——

向 井 秀 忠

松 山 大 学
言語文化研究 第28巻第1号（抜刷）
2008年9月

Matsuyama University
Studies in Language and Literature
Vol. 28 No. 1 September 2008

『エマ』におけるハリエットの
ジブシー遭遇事件の顛末をめぐって
—— 18 世紀以後のイギリス文学における
ジブシー表象からのひとつの解釈 ——

向 井 秀 忠

1.

ジェイン・オースティン (Jane Austen) の小説では、ヒロインが暮らす町に見知らぬ人たちがやって来ることによって物語が動き始める。例えば、男性の登場人物では、『分別と多感 (*Sense and Sensibility*)』のエドワードとウィロビー、『高慢と偏見 (*Pride and Prejudice*)』のダーシー氏とウィカム、『マンズフィールド・パーク (*Mansfield Park*)』のヘンリー・クロフォード、『エマ (*Emma*)』のフランク・チャーチル、そして『説得 (*Persuasion*)』のエリオット氏などがヒロインの前に登場することが物語の展開において重要な役割を果たす。結末でヒロインと結ばれるエドワード、ダーシー氏、あるいはウィロビー、ウィカム、ヘンリー、エリオット氏のようにヒロインを惑わす者とその役割を問わず、外部からの侵入者によって、一見すると平穏そうに見えていた社会の安定性が掻き乱され、騒動がひとしきり起こった後、誘惑者となった者たちは立ち去り、反対に他の者たちはヒロインと結婚することによって、安定を失っていた町は、それもまた束の間のものであるのかもしれないが、一応の落ち着きを取り戻す。このような、「他者」によって、主人公が属する社会が揺るがされることが物語を展開させる動力となることは、オースティンの作品のみならず、イギリス小説の多くに見られるパターンでもある。

ジョージ・エリオット (George Eliot) の『サイラス・マーナー (*Silas Marner*)』の、どこから来たのかわからない正体不明の人物が、あたかも盗まれたお金の引き換えであるかのように与えられた子どもを手に入れることを通して地域に受け入れられるようになるという物語も、同様のパターンをたどるものであると言える。その冒頭には、当時の一般的な人々が持ち得ていた生活圏についての感覚を説明した次のような個所がある。

To the peasants of old times, the world outside their own direct experience was a region of vagueness and mystery: to their untravelled thought a state of wandering was a conception as dim as the winter life of the swallows that came back with spring; and even a settler, if he came from distant parts, hardly ever ceased to be viewed with a remnant of distrust, which would have prevented any surprise if a long course of inoffensive conduct on his part had ended in the commission of a crime; especially if he had any reputation for knowledge, or showed any skill in handicraft.¹⁾

ここには、日常の生活圏を超えた先については想像力さえ及ばず、よそから現れた人々はあくまでも他者的な存在であるという当時の人々の実感が十分に描かれており、これは現在でも理解できる感覚であろう。

リンダ・コリー (Linda Colley) が『イギリス国民の誕生 (*Britons: Forging the Nation 1707-1837*)』の中でピーター・サーリンズ (Peter Sahlin) を引きながら、「男も女も、自分たちが誰ではないか、何ではないかをいうことで、自分たちが何者であるかを規定しようとするのである²⁾」とまとめているように、自らの結束を再確認するために、自分たちの共通項を確認するよりはむしろ自分たちとは相容れないもの、つまり他者的な存在を意識することの方が有

1) *Silas Marner*. Ed. David Carroll. London: Penguin, 2003, p. 5.

2) リンダ・コリー, 『イギリス国民の誕生』(名古屋: 名古屋大学出版会, 2000年) p. 6.

効であると言える。ここでコリーが意識しているのは対フランスという他国の存在であるが、この考え方は次のようにオースティンやエリオットの作品にも当てはまるであろう。「他者」なるものは、コリーが扱う他国や植民地などのように海を越えた先にある場合もあれば、オースティンやエリオットの小説で描かれるロンドンをはじめとする国内という場合もある。外国であろうと国内であろうと、当時の多くの人々にとっては、日常生活の範囲を超えた先が未知の世界であったことには変わりがない。

ただし、オースティンの作品の場合、「他者」を受け入れるか否かの基準はやや複雑なものとなり、その人物の価値観が共同体にとって受け入れ可能かどうかが大い。例えば、『分別と多感』において、作品の前半でウィロビーはマリアンと価値観を共有するものの、大病後にマリアンが変化すると、ヒロインたちが暮らすバートンを支配する価値観とは相容れなくなる。一方、エドワード・フェラーズとブランドン大佐は、それぞれが相手役のヒロインと価値観を共有するようになることでバートンに受け入れられる（もっとも、それぞれが越えるべき障壁を持っており、エドワードは他の女性との婚約の解消、ブランドン大佐は真の自分の価値を相手に認めさせることが必要なのであるが）。『エマ』においては、フランク・チャーチルやジェイン・フェアファックスはハイベリーの価値観と相容れないことによって去っていくことになり、ハリエット・スミスの場合は町を出ていくことはないものの、小作農と結婚したことでヒロインの交際範囲から徐々に遠ざけられていく。このように、価値観の共有に加え、階級の問題が絡んでいることがオースティンの世界をさらに複雑なものとしている。

エリオットの『サイラス・マーナー』では、「他者」を共同体の内部に取り込んでいくことで揺れ動いた村社会を安定化させるのであるが、オースティンの場合は、価値観や階級によって相容れない者を厳格に排除することによって共同体の安定化を図っていると言えよう。取り込むか、排除するか、その方向性は正反対であるが、いずれも「他者」の侵入が共同体の安定を揺るがし、そ

の存在を内包あるいは排除するにしても、そのときの経験を通して共同体の再安定化を図ろうとする点では共通する。しかしながら、「他者」なる存在は、何も外国や植民地などの海外領土、そして突然にどこからともなく現れる侵入者たちだけではない。そのような存在をもっと身近に見出せるものとして、イギリス国内のジプシーが考えられる。事実、オースティンやエリオットのみなならず、他にも多くの作家や詩人たちがジプシーについて作品で言及しており、そこでの描き方を探っていくと、彼らが身近な「内なる他者」といった存在のひとつであったことがわかってくる。

本論では、まず18世紀後半からのイギリスの文学作品におけるジプシーの描かれ方を概観し、この「内なる他者」がどのように表象されてきたのかを探っていきたい。そして、その議論をもとに、オースティンの『エマ』に挿入されたジプシー遭遇事件の持つ意味について考察していきたい。

2.

イギリスの文学作品に現れるジプシー像については、ジョン・サンプソンがまとめたアンソロジー³⁾とデボラ・エプスタイン・ノード (Deborah Epstein Nord) による研究書⁴⁾というすぐれたテキストと研究成果があるので、これらを中心に参考にしながら、イギリス文学の中でジプシーがどのように描かれてきたのかについて見ていきたい。

もともと非常に身近な存在であるだけに、イギリスのみならず、ヨーロッパの文学作品にはジプシーに言及したものが多い。イギリスもその例外ではなく、扱い方には大きな差があるものの、いつの時代においても多くの作品に登場している。作品に現れるジプシー像を概観した場合、まずは恐ろしく警戒す

3) John Sampson. Ed. *The Wind on the Heath: A Gypsy Anthology*. Edinburgh: T. and A. Constable, nd.

4) Deborah Epstein Nord. *Gypsies and the British Imagination, 1807-1930*. New York: Columbia UP, 2006.

べき対象として、そして次には神秘的存在として登場していることがわかる。以下、いくつかの作品を引きながら、それぞれのパターンについて具体的にみていきたい。

オースティンの習作期の 1792 年に書いたとされる作品で、どたばた喜劇である掌編『イヴリン (“Evelyn”)』には、“He felt indeed almost distracted with his fears, and shutting his Eyes till he arrived at the Village to prevent his seeing either Gipsies or Ghosts, he rode on a full gallop all the way.”⁵⁾ という場面がある。ここでは、「ジプシーたち」は「幽霊たち」と同じ恐怖の対象としてのみ扱われており、得体の知れないものが与える恐怖感を表現するために使われていることがわかる。

こうした漠然とした「得体の知れなさ」は、やがて犯罪を連想させるものへと膨らんでいく。例えば、先にも引用したエリオットの『サイラス・マーナー』においては次のように書かれている。

And as memory, when duly impregnated with ascertained facts, is sometimes surprisingly fertile, Mr Snell gradually recovered a vivid impression of the effect produced on him by the pedlar's countenance and conversation. He had a 'look with his eye' which fell unpleasantly on Mr Snell's sensitive organism. To be sure, he didn't say anything particular—no, except that about the tinder-box—but it isn't what a man says, it's the way he says it. Moreover, he had a swarthy foreignness of complexion which bodied little honesty.⁶⁾

下線部の「正直さをほとんど窺うことのできないよそ者らしい浅黒い顔」と表現されるように、自分たちとは異なる肌の色をしたジプシーたちに対する警

5) Jane Austen. *Minor Works*. Ed. R. W. Chapman. The Works of Jane Austen Vol. VI. Oxford: Oxford UP, 1986. 189.

6) *Silas Marner*, 61. 下線は筆者による。

戒心と恐怖心がここに現れていることがよくわかる。もう少し時代が下ってからも同じような表現が用いられている。その例として、アーサー・コナン・ドイル (Arthur Conan Doyle) のホームズ・シリーズの一編『まだらの紐 (“The Adventure of the Speckled Band”)] から下記の部分を引きたい。

“I had,” said he (Sherlock Holmes), “come to an entirely erroneous conclusion which shows, my dear Watson, how dangerous it always is to reason from insufficient data. The presence of the gipsies, and the use of the word “band,” which was used by the poor girl, no doubt to explain the appearance which she had caught a hurried glimpse of by the light of her match, were sufficient to put me upon an entirely wrong scent. . . .”⁷⁾

あの冷静沈着なホームズでさえ、ジプシーの姿を見かけたことによって自分の推理が惑わされたことを告白しており、それだけ、ジプシーが犯罪と強く結びついた連想の流れにあることがよくわかる。

ジプシーたちがやむなく選んだ生業のひとつには「預言者 (“a fortune-teller”)]」があった。例えば、シャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë) の『ジェイン・エア (Jane Eyre)』にはジプシーの老婆が女性たちの運勢を占うという場面がある。この占い師は次のように描写される。

. . . the Sybil—if sibyl she were—was seated snugly enough in an easy-chair at the chimney-corner. She had on a read cloak and a black bonnet: or rather, a broad-brimmed gypsy hat, tied down with a striped handkerchief under her chin. An extinguished candle stood on the table; she was bending over the fire, and seemed reading in a little black book, like a Prayer Book, by the light

7) Arthur Conan Doyle. *The Hound of the Baskervilles with “The Adventure of the Speckled Band”*. Ed. Francis O’Gorman. Ontario: Broadview, 2006. 236.

of the blaze : she muttered the words to herself, as most old women do, while she read ; she did not desist immediately on my entrance : it appeared she wished to finish a paragraph.⁸⁾

また、ある登場人物が⁹⁾ “A shockingly ugly old creature, miss ; almost as black as a crock.”⁹⁾ と評したその顔は次のように具体的に描写される。

I (Jane Eyre) felt now as composed as ever I did in my life : there was nothing indeed in the gypsy’s appearance to trouble one’s calm. She shut her book and slowly looked up ; her hat-brim partially shaded her face, yet I could see, as she raised it, that it was a strange one. It looked all brown and black : elf-locks bristled out from beneath a white band which passed under her chin, and came half over her cheeks, or rather jaws : her eye confronted me at once, with a bold and direct gaze.¹⁰⁾

この “a low imposter”¹¹⁾ あるいは “a rough one”¹²⁾ とも蔑まれるジプシーの老婆は、そこにいた女性たちの子どもの頃のこと、部屋に置いている書物や装飾品、彼女たちが考えていることや好きな人の名前、そして将来への夢など、そのすべてを当てて驚かせる。

実は、このジプシーの老婆はロチェスター氏が変装したものであり、占ってやった女性たちのことについてはもともとよく知っていたという種明かしがついている。結局、唯一、冷静沈着に対応したジェイン・エアだけが、やがて口調、身振り、そして若々しい手の様子から正体を見抜くことになる。ここで重

8) Charlotte Brontë. Jane Eyre. Ed. Stevie Davies. London : Penguin, 2006. 227.

9) *Jane Eyre*, 223.

10) *Jane Eyre*, 227.

11) *Jane Eyre*, 222.

12) *Jane Eyre*, 223.

要なのは、黒く塗った顔、奇妙な服装、そして預言をする際の物々しい口ぶりといった、ロチェスター氏がジプシーの老婆の扮装に用いた特徴であり、他の人たちがその扮装から受けた印象である。若々しい男性が変装したジプシーの老婆であれば、いくら蠟燭の明かりだけの薄暗い部屋であったにしてもいかにも気づきそうなものである。ところが、そうはならないところに、ここでのロチェスター氏の扮装が当時の人たちが持っていたある種のジプシー像を典型的に模したものであったからと察することができる。

預言者とジプシー像がヤマ師的なイメージを持っていた一方で、自分たちには持ち得ない能力を所持し、西洋的な理性中心主義では理解不可能な謎を解き明かしていくのではないかという神秘的なイメージも生まれてくる。例えば、マシュー・アーノルド (Matthew Arnold) は、1853年に自作の詩『ジプシー・スカラー (“The Gypsy Scholar”)』に添えた詩集の序文において次のように書いている。

“There was very lately a lad in the University of Oxford, who was by his poverty forced to leave his studies there; and at last to join himself to a company of vagabond gipsies. Among these extravagant people, by the insinuating subtilty of his carriage, he quickly got so much of their love and esteem as that they discovered him their mystery. After he had been a pretty while well exercised in the trade, there chanced to ride by a couple of scholars, who had formerly been of acquaintance. They quickly spied out their old friend among the gipsies; and he gave them an account of the necessity which drove him to that kind of life, and told them that the people he went with were not such impostors as they were taken for, but that they had a traditional kind of learning among them, and could do wonders by the power of imagination, their fancy binding that of others: that himself had learned much of their art, and when he had compassed the whole secret, he intended, he said, to leave

their company, and give the world an account of what he had learned.”—
Glanvil’s *Vanity of Dogmatizing*.¹³⁾

実際に、預言という仕事に携わっていたのはジプシーの女性であったが、西洋の英知を超えた知恵を持ち得る存在としてのジプシーは、先のアーノルドの詩に登場するような男性的なイメージを伴うことが多い。「得体が知れない」というマイナスのイメージが、裏返って、理解不可能なものに対する憧憬のような思いへと変わっていくこと、言葉を換えれば、「恐れ」が「畏れ」へと変化していくことは、時代や場所を問わず、よく見られることであろう。

3.

以上、イギリスの文学作品に見られる典型的なジプシー像をまとめてきたが、「恐れ」とも「畏れ」とも違ったイメージでとらえているものもある。ここでは、もっと身近にあるもの、つまりイギリスの風景を構成するひとつの素材としてジプシーが用いられている。例えば、1832年に出版された『わが村 (*Our Village*)』において、メアリ・ラッセル・ミットフォード (Mary Russell Mitford) は19世紀のある村の様子を次のように描いている。

It was a pretty picture, with its soft autumnal sky, its rich woodiness, its sunshine, its verdure, the light smoke curling from the fire, and the group disposed around it so harmless, poor outcasts ! And so happy—a beautiful picture ! I stood gazing on it till I was half ashamed to look longer, and came away half afraid that they should depart before I could see them again.¹⁴⁾

13) Arnold, Matthew. *Matthew Arnold’s Poems*. Ed. R. A. Scott-James. London : J. M. Dent & Sons, 1955. 213.

14) Mitford, Mary Russell. *Our Village : Sketches of Rural Character and Scenery*. Ed. Israel Gollancz. NP : The Temple Classics, nd. 319.

また、ジョン・クレア (John Clare) も『ジプシーたちの夕刻の火 (“The Gipsies Evening Blaze”)』と題した詩の中で、ジプシーのいる風景について次のように書いている。

To me, how wildly pleasing is that scene
 Which does present in evenings dusky hour
 A group of gipsies, center'd on the green
 In some warm nook, where Boreas has no power
 Where sudden starts the quivering blaze behind
 Short shrubby bushes nibbl'd by the sheep
 That mostly on these short-sward pastures keep—
 Now lost now shines now bending with the wind
 And now the swarthy sybil kneels reclin'd
 With progging stick she still renews the blaze
 Forcing bright sparks to twinkle from the flaze
 When this I view the all attentive mind
 Will oft exclaim so strong the scene pervades
 ‘Grant me this life thou spirit of the shades !’¹⁵⁾

ただし、単純な憧れだけではなく、例えば、ウィリアム・ワーズワース (William Wordsworth) の詩『ジプシーたち (“Gipsies”)』のように少し屈折した見方をしているものもある。

Yet are they here ? —the same unbroken knot
 Of human beings, in the self-same spot !

15) John Clare. *Major Works*. Oxford : Oxford UP, 2004, 9.

Men, Women, Children, yea the frame
Of the whole Spectacle the same !
Only their fire seems bolder, yielding light :
Now deep and red, the colouring of night ;
That on their Gipsy-faces falls,
Their bed of straw and blanket-walls.
—Twelve hours, twelve bounteous hours, are gone while I
Have been a Traveller under open sky,
Much witnessing of change and chear,
Yet as I left I find them here !

The weary Sun betook himself to rest.
—Then issued Vesper from the fulgent West,
Outshining like a visible God
The glorious path in which he trod.
And now, ascending, after one dark hour,
And one night's diminution of her power,
Behold the mighty Moon ! this was
She looks as if at them—but they
Regard not her : —oh better wrong and strife
Better vain deeds or evil than such life !
The silent Heavens have goings on ;
The stars have tasks—but these have none.¹⁶⁾

このように、イギリスの風景の中に溶け込んだジプシーたちについては、空

16) William Wordsworth. *The Major Works*. Oxford : Oxford UP, 2000, 332.

間的そして慣習的な自由を持ち得るように見え、そんな彼らに対する憧れの念を表明しているものもある。例えば、ジョージ・エリオットは長編詩『スペインのジプシー (*The Spanish Gypsy*)』において次のように書いている。

All things journey : sun and moon,
Morning, noon, and afternoon,
Night and all her stars :
'Twixt the east and western bars
Round they journey,
Come and go !
We go with them !
For to roam and ever roam
Is the Zincali's loved home.¹⁷⁾

エリオットには、ジプシーあるいはジプシー的な存在に憧れ、自分を同化させたいという憧憬の念を登場人物に抱かせる傾向は強かったようで、1860年出版の『フロス河畔の水車場 (*The Mill on the Floss*)』において、ジプシーに憧れるヒロインとしてマギー・タリヴァーを登場させる。この作品においてジプシーが出てくるのは、彼女がジプシーたちと一緒に暮らすために家出を企てる個所である。幼い頃から、その外見が似ているとして、彼女はジプシーの子どもではないのかと言われ続けて育ってきた。そのため、この頃の彼女は、自分の属する共同体がさまざまな規制を彼女に押しつけてくることに辟易しており、その窮屈な世界を抜け出すため、そんな共同体の外側にいる他者的な存在としてのジプシーの自由さに強く惹かれていた。彼女は次のように考える。

17) Sampson, 39.

No! she would run away and go to the gypsies, and Tom should never see her any more. That was by no means a new idea to Maggie: she had been so often told she was like a gypsy and 'half wild' that when she was miserable it seemed to her the only way of escaping opprobrium and being entirely in harmony with circumstances, would be to live in a little brown tent on the commons: the gypsies, she considered, would gladly receive her and pay her much respect on account of her superior knowledge. She had once mentioned her views on this point to Tom, and suggested that he should stain his face brown and they should run away together; but Tom rejected the scheme with contempt, observing that gypsies were thieves and hardly got anything to eat and nothing to drive but a donkey.¹⁸⁾

ここで彼女が考えているのは、あくまでも彼女が読んだ本から得た知識だけにに基づいたものであり、何らかの実体験などを踏まえたものではない。さらに面白いのは、単に一緒に暮らしたいと思うだけではなく、自分がジプシーたちの導き手となり、彼らを高めていってやりたい、そしてそれによって尊敬もされるだろうなどと考えていることである。ここに、「野蛮」な人たちを啓蒙し、その手助けをするという名目で植民地化を進めていった当時のイギリスの考え方との共鳴が見出せることは興味深い。このように、この一方的な憧憬の念はまだ世間知らずの少女の勝手な思い込みに過ぎないことはすぐにわかる。

Maggie began to think that Tom might be right about the gypsies—they must certainly be thieves, unless the man meant to return her thimble by and by. She would willingly have given it him, for she was not at all attached to her thimble; but the idea that she was among thieves prevented her from feeling

18) George Eliot. *The Mill on the Floss*. Ed. A. S. Byatt. Harmondsworth: Penguin Books, 1986. 168.

any comfort in the revival of deference and attention towards her—all thieves except Robin Hood were wicked people.¹⁹⁾

そして、実際にジプシーの中に飛び込んだ彼女は、ジプシーの生活の厳しさを目の当たりにして、ジプシーたちはみんな泥棒であると考えた兄の話を実際に追体験したような印象を持ち、幻滅することになる。

Her idea about gypsies had undergone a rapid modification in the last five minutes. From having considered them very respectful companions, amenable to instruction, she had begun to think that they meant perhaps to kill her as soon as it was dark, and cut up her body for gradual cooking...²⁰⁾

日々の食べ物にも事欠くようなジプシーたちにとって、マギーが語って聞かせるコロンブスの話など何かの興味を引くわけもない。こうして、失望したマギーは、文字通りに泣きながらジプシーたちのもとから去り、家へと帰っていくのである。このエピソードはすべてマギーの視点から語られることもあり、具体的に何かひどいことをされた訳ではないものの、最後には、「ジプシーはみんな泥棒」という、トムをはじめとする多くの人たちに広まっていた偏った見方へと傾いていくことがはっきりとわかる。

エリオットが、外側から見た他者としてのみジプシーを描くのではなく、実際にジプシーたちの生活を内側から直接に描こうとしたことは新しいと言える。しかしながら、このようなエリオットのジプシーに対する見方もまた、あくまでも自分たちの共同体の中にとどまりながらジプシーを見ているのであって、それはいくら好意的なものであるにしても、あくまでも偏見に満ち、「恐れ」と「畏れ」とが入り混じっている点で、この時期におけるジプシー像の典

19) *The Mill on the Floss*, 176.

20) *The Mill on the Floss*, 177.

型のひとつであると指摘できるであろう。

4.

オースティンにも、『エマ』においてジプシーを登場させた有名な場面がある。先にも触れたように、『イヴリン』においては、闇夜を恐がる主人公の滑稽さを強調するために用いられていた些細な言及に過ぎないのに対し、『エマ』においてはもう少し重要な意味合いを持つように位置づけられている。エマが目にかけていたハリエット・スミスという女の子が友人と連れ立って町外れを歩いていると、ジプシーたちに遭遇し、パニックになった彼女は取り囲まれて物乞いされるという場面である²¹⁾。まずは、少し長くなるが、その部分を読んでみたい。

Miss Smith, and Miss Bickerton, another parlour boarder at Mrs. Goddard's, who had been also at the ball, had walked out together, and taken a road, the Richmond road, which, though apparently public enough for safety, had led them into alarm. –About half a mile beyond Highbury, making a sudden turn, and deeply shaded by elms on each side, it became for a considerable stretch very retired; and when the young ladies had advanced some way into it, they had suddenly perceived at a small distance before them, on a broader patch of greensward by the side, a party of gypsies. A child on the watch, came towards them to beg; and Miss Bickerton, excessively frightened, gave a great scream, and calling on Harriet to follow her, ran up a steep bank, cleared a slight hedge at the top, and made the best of her way by

21) 1995年には、『エマ』は映画版とITVのテレビドラマ版のふたつが同時に上映・放映されるという偶然が重なった。このハリエットがジプシーに襲われる場面について、双方がどのように描いているのかを比較することは興味深い。

a short cut back to Highbury. But poor Harriet could not follow. She had suffered very much from cramp after dancing, and her first attempt to mount absolutely powerless—and in this state, and exceedingly terrified, she had been obliged to remain.

How the trampers might have behaved, had the young ladies been more courageous, must be doubtful; but such an invitation for attack could not be resisted; and Harriet was soon assailed by a half a dozen children, headed by a stout woman and a great boy, all clamorous, and impertinent in look, though not an absolutely in word. —More and more frightened, she immediately promised them money, and taking out her purse, gave them a shilling, and begged them not to want more, or to use her ill. —She was then able to walk, though but slowly, and was moving away—but her terror and her purse were too tempting and she was followed, or rather surrounded, by the whole gang, demanding more.

In this state Frank Churchill had found her, she trembling and conditioning, they loud and insolent. . . . The terror which the woman and boy had been creating in Harriet was then their own portion. He had left them completely frightened; and Harriet eagerly clinging to him, and hardly able to speak, had just strength enough to reach Hartfield, before her spirits were quite overcome. It was his idea to bring her to Hartfield: he had thought of no other place.²²⁾

ここでのジプシーの登場がいくつかの役割を担っていることは確かである。引用中にもあるように、ハリエットとその友人がもっと毅然とした態度で接していれば避けることができたにも拘らず、へたに騒いだことがジプシーたちの

22) Austen, Jane. *Emma*. Ed. R. W. Chapman. The Works of Jane Austen Vol. IV. Oxford: Oxford UP, 1986. 333-334. 下線は筆者による。

物乞いを激しくするよう誘発したことは確かであろう。このことは、それほど大したことでもないことに大騒ぎをしてしまうハリエットの浅はかさ（好意的に見れば「世間知らずさ」）を表すエピソードとして読むことができるであろう。他にも、当時、ジプシーを取り締まるために、ジプシーと親しく接した者を厳罰に処するという法律があり、ハリエットが騒いだのはこのことを知っていたからだとする批評家もいる²³⁾。しかしながら、確かにそのような法律は存在していたが、実際に厳密に適用されるようなことは稀であったので、ハリエットがそのために騒いだわけではないと反論することも可能であろう。無知で世間知らずの娘として描かれているハリエットが、ジプシーをめぐる法律のことを知っており、当時の社会事情に特に精通していたとは考えにくく、ここでの騒動は、やはり彼女が臨機応変に対応できなかったことに原因があったとすることがもっとも説得力がある。

『エマ』においてジプシーのこの場面を盛り込んだ理由については、他にもいくつか異なった説明がされている。段々と調子づいてきたエマの妄想癖およびお節介具合をさらに煽り、その方向へとプロットをさらに推し進めていくための役割を果たしているとするものが多い。あるいは、ナイトリー氏は、一見すると地主としての職務を完璧に果たしているように見えるが、ジプシーのような危険な人たちを領地内に入れ、そして住民たちに害を与えてしまったことは、彼の領地運営の手腕が決して万全なものではないことを示す挿話と理解する向きもある。このように、『エマ』におけるジプシーの場面の挿入についてはいくつかの解釈があるが、ここで新たな解釈を試みてみたい。

まず、エマはハリエットがどこかの貴族の落とし子であろうと勝手に思い込んでいるが、このエマの思い込みのあり方には、多くの人たちがジプシーに関して共有しているステレオタイプと近似性があることから論を始めたい。ハリエットは、父親はどこの誰だかわからず、今は町の寄宿学校で生活している。

23) Susannah Fullerton. *Jane Austen and Crime*. Sydney: Jane Austen Society of Australia Inc., 2004. 49.

彼女のことを気に入ったエマは、彼女の父親はどこか身分の高い人物であるに違いないと考え、それに見合った女性になるようにきちんと育ててやろうと決心する。そこで、もともととは相思相愛の雰囲気にあった農夫とは身分が違うからと別れさせ、自分が彼女にふさわしい結婚相手を見つけ出す骨を折ってやろうと考える。教区牧師夫人であるエルトン夫人は地主の娘であるエマにいわれない対抗心を持ち、ジェイン・フェアファックスに住み込み家庭教師の職を世話してやろうとするなど、ジェインの保護者然を気取ることでエマに対抗しようとする。そんなこともあり、エマもそんなライバル然とした言動には心穏やかではないことが多く、エルトン夫人のそんな成り上がり根性を軽蔑しさえしている。しかしながら、結婚相手探しと職業斡旋という違いはあるものの、当人たちの意志や志向は無視し、勝手に自分たちの希望を押しつけているという点において、二人は本質的には同じことをやっている。知らぬ間にはいえ、自分が軽蔑している人間と同じことをやっていることに作者のヒロインの行動に対する批判的な見方を読み取ることができる。

ただし、ここで興味深いのはその点ではなく、エマが勝手にその素性について思いめぐらせているハリエットの設定が、他の多くの作家たちがジプシーを作品に取り込むときのパターンに対する一種のパロディとなっていることである。ジプシーが人々に喚起させる根強いイメージのひとつに、ジプシーたちが子供たちを誘拐するというものがある。そのため、ヨーロッパで書かれるジプシーが登場する物語の展開パターンに、ジプシーの子どもとして育てられていた人物が、ちょっとした偶然から実はそうではないことがわかり、自分の正しい出自を再認識するという設定が多い。例えば、セルバンテス（Cervantes）の『模範小説集（*Novelas Ejemplares*）』所収の「ジプシー娘（“*La gitanilla*”）」はまさにこのパターンをたどったもので、「金髪・青い目・白い肌」という、どう考えても外見的にはジプシーの娘とは思えない設定の女性が主人公として登場する。やがて、この女性は実は貴族令嬢であったことが判明するのだが、その結末部分に説得力を持たせるための設定なのであろう。こちらは男性が主人

公であるが、ウォルター・スコット (Walter Scott) の『ガイ・マナリング (Guy Mannering)』もまた、同様のパターンの物語となっている²⁴⁾。ゴシック・ノヴェルの設定や物語展開の不自然さを指摘する『ノーサンガー・アベイ (Northanger Abbey)』を書き上げたオースティンが、このような設定を不自然なものと感じ、ある種のパロディとして同様に作品に取り込んだことは十分に考えられるであろう。

先にも述べたように、ハリエット・スミスの素性を正確に知る者は、本人も含め、誰一人として登場しない (おそらく、寄宿学校校長のゴダード夫人は知っているのであろうが、さすがに公言していない)。つまり、この町の人たちにとって、ハリエットは謎の存在なのである。共同体にとってのこの得体の知れなさのあり方は、ジプシーのものと重なってはこないだろうか。そこで、エマは、何も正確な情報がないため、おそらくは読み親しんだのであろう物語などの知識を参考に、身分のよい家に生まれながらも、何らかの事情によって致し方なく寄宿学校に預けられている女の子という、ハリエットの物語を作り上げる。さらに、勝手な親切心から、彼女の生まれのよさに報いるため、農夫とは別れさせ、その身分にふさわしい結婚相手を見つけようとあれこれと努力をするのである。

ところが、現実には、エマが期待しているような「ジプシー物語」として展開するわけではない。作品の結末近くで、ハリエットがナイトリー氏に好意を抱いていることを知らされて初めて、エマは自分の彼への想いに気づくことになるのであるが、同時に、彼女に対する保護者熱もさっと冷めてしまう。そして、これまでハリエットの生まれについて思いめぐらせていたことをすっかり忘れ

24) ジョージ・エリオットの『スペインのジプシー』はこれらとは正反対の設定になっている。白人貴族によって育てられていた娘が、結婚式の直前、実はジプシーの娘であったことが発覚する。そして、彼女は、自分の出自に従うべく、ジプシーの一団のリーダーとなるために戻っていくという物語である。これは、エリオットが「個人」と「出自」とのどちらを選択するのかをテーマとするために使用した設定であるが、他によく見られる「ジプシー物語」枠組みを利用していることは興味深い。

たかのように、ハリエットは身分的にもナイトリー氏には不釣り合いであると考えられるようになる。結局、最後には、ハリエットは良家の私生児などではなく、商人の娘であることが判明するという落ちがついている。

ハリエットの出自についてエマが勝手に物語を作り上げていく様は、典型的な「ジプシー物語」のパターンをなぞったものであり、この部分がある種のパロディとして読むことは十分に可能であろう。ゴシック・ノヴェルのパロディとして『ノーサンガー・アベイ』を書いたオースティンであれば、『エマ』におけるこの場面を「ジプシー物語」のパロディとして書いたことも十分に考えられる。

5.

ハリエットがジプシーたちに襲われた挿話は、『エマ』の結末でのエマとナイトリー氏との結婚にもつながってくると考えられる。二人の結婚を成就させるためには、お互いの愛情を確認し合うだけでは十分ではなく、越えなくてはいけない大きな問題がもうひとつあった。エマの父親であるウッドハウス氏の同意を得ることである。ウッドハウス氏は、自分自身の健康を気遣うだけでなく、同じように周りの人たちに対してもあれこれと過剰に心配をし、ナイトリー氏の弟でエマの姉と結婚して彼の義理の息子となった、合理主義的な性格のジョン・ナイトリーからはうろさがられるようなところがある。また、ウッドハウス氏には、自分を囲む生活環境が大きく変わることをとにかく嫌う傾向もある。例えば、作品の冒頭では、長くウッドハウス家の住み込み家庭教師を務めたテーラー嬢（結婚後はウェストン夫人）の結婚について、条件的には何ら反対するような理由がないにも拘らず、これは不幸なことに違いないと譲らない。長女の結婚についても同様であった。

ナイトリー氏は、結婚後は自分がウッドハウス家で暮らしても構わないとさえ考えているのであるが、ウッドハウス氏からは、そうであるならば、今でも

ほぼ毎日会いに来ているのであるから、今後も同じようにすれば、何もわざわざ結婚する必要などないのではないか、と言われそうであった。そんなとき、鶏泥棒の事件が起きる。こんな事件が起こるような物騒な世の中なので、父娘二人きりで暮らすよりは、男性であるナイトリー氏と一緒に住んでもらっていた方が安心では、と説き伏せることで、さすがのウッドハウス氏も心配性のその気質から難なく説得されることになった。こうして、二人の結婚は、誰からも祝福されるものとなったのである。

この鶏泥棒の犯人については作中では明確にはされていない。ただ、誰もが顔馴染みの狭い町の中で、住人の誰かが堂々と自分たちの地主の屋敷に鶏を盗みに入ることは考えにくいであろう。そうであれば、犯人の有力候補として、ハリエットを襲ったジプシーの一団が挙がってきてもおかしくはない。事実、1995年にイギリスのテレビ局ITVが制作・放映したテレビドラマ版『エマ』の冒頭でこの鶏泥棒の場面が引用されているが、この犯人たちの風貌はジプシーの男性を意識したものと見受けられる。これは価値観の相違に帰するところが大きいのであるが、ジプシーたちには「自然のものはみんなのもの」という意識が根強く、そのため、大きな抵抗感なく、作物や家禽などを勝手に持ち去ることがあったようだ。そこには他人のものを盗むといった認識はなかったという。このように考えていくと、先のハリエットがジプシーに襲われる挿話は、エマとナイトリー氏の結婚生活を円滑に始めるための伏線の役割を果たしているとも言える。

ところが、このハリエットがジプシーに襲われる挿話に添えられた次のような記述を読むと、また違った様相を帯びてくる。

The gipsies did not wait for the operations of justice ; they took themselves off in a hurry. The young ladies of Highbury might have walked again in safety before their panic began, and the whole history dwindled soon into a matter of little importance but to Emma and her nephews : -in her

imagination it maintained its ground, and Henry and John were still asking every day for the story of Harriet and the gipsies, and still tenaciously setting her right if she varied in the slightest particular from the original recital.²⁵⁾

ハリエットのジプシー遭遇事件の後日談について語られる場面であるが、他の多くの出来事と同じく、世間的にはこの件も忘れ去られていく運命にある。ここで興味深いのは、エマが甥に求められて話をする時、前回と話が少しでも変わってしまっている場合には、甥たちが敏感に反応してすぐにそれを修正することである。このエピソードは、繰り返されて語られる物語が段々と元の話とは変わっていき、やがては真実からは大きく異なるものになっていく場合があること、そして、そうなってしまっても、語り続けられていくことがやがては真実となっていくという、一種の噂話による物語形成のパターンをたどったものと考えることができる。これは、ジプシーをめぐる一般的な言説成立のパターンの要約でもあり、この成立パターンは、その他の他者的存在についても当てはまるものであろう。

この点について、映画版『エマ』のハリエットのジプシー遭遇事件の描き方は象徴的である。原作の小説では、先にも引用した中で下線を付したように、実際はハリエットはジプシーたちによって何か手荒な仕打ちを受けたわけではない。物乞いの子どもたちに囲まれてしまったに過ぎないものを、彼女が大げさに騒いだため、事が大きくなっただけのことである。ところが、映画版では、ハリエットを取り囲むのはジプシーの大人たちであり、まさに「襲撃」というイメージの強いものとなっている。ITVのドラマ版が、原作に忠実にジプシーの子どもたちがハリエットに群がる様子を同じ場面として描いているのと比べた場合、なかなか興味深い問題が見出せる。例えば、ここでの映画版のジプシーの描き方は、物語を大げさにすることで視聴者の興味を引き付けようと

25) *Emma*, 336.

する映画版の製作スタッフの意図を読み取ることができるだけではなく、ジプシーに対する一般の世間的な評価を象徴的にまとめたものとしても受け取ることができるのではないだろうか。以上のように考えると、ハリエットがジプシーと遭遇するこの場面には、共同体が自己強化を図っていくプロセスのひとつを描き出したものとして読むことができそうだ²⁶⁾

参 考 文 献

- Amano, Miyuki. "The Widening Vision and Undying Hope in *The Spanish Gypsy*". *The George Eliot Review*. No. 36. (2005) 63-72.
- Behlmer, George K. "The Gypsy Problem in Victorian England". *Victorian Studies*. Vol. 28. No. 2 (Winter, 1985) 231-253.
- Borrow, George. *The Zincali—An Account of the Gypsies of Spain*. Np: Biblio Bazaar, 2006.
- Carroll, Alicia. *Dark Smiles: Race and Desire in George Eliot*. Athens: Ohio UP, 2003.
- Gard, Roger. *Jane Austen's Novels: The Art of Clarity*. New Haven: Yale UP, 1994.
- Nord, Deborah Epstein. "'Marks of Race': Gypsy Figures and Eccentric Femininity in Nineteenth-Century Women's Writing". *Victorian Studies*. Vol. 41. No. 2. (<http://iupjournals.org/victorian/vic41-2.html>) Access: 2007. 5. 15.
- , *Gypsies and the British Imagination, 1807-1930*. New York: Columbia UP, 2006.
- Olsen, Kirstin. *All Things Austen: An Encyclopedia of Austen's World*. Vol. I: A-L. Westport, CT: Greenwood Press, 2005.
- Said, Edward. *Orientalism*. New York: Vintage Books, 1979.
- Scott, Walter. *Guy Mannering*. Ed. P. D. Garside. London: Penguin Books, 2003.
- Simpson, David. "Figuring Class, Sex, and Gender: What Is the Subject of Wordsworth's 'Gipsies'?" *The South Atlantic Quarterly*. Vol. 88, No. 3. (Summer, 1989) 541-567.
- Stephen, Leslie. *George Eliot*. New York: The Macmillan Company, 1902.
- Trumpener, Katie. "The Time of the Gypsies: A 'People without History' in the Narrative of the West". Ed. Kwame Anthony Appiah and Henry Louis Gates, Jr. *Identities*. Chicago: U of

26) イギリス文学の中でジプシーを扱った主なもので、ここでは取り上げなかったものがいくつかある。中でも、ジョージ・ボロウ (George Borrow) の一連のジプシーを扱った小説や書き物についても触れるべきであった。この、現在は忘れられているに等しいものの、かつては非常に好評をもって迎えられ、広く読まれ親しまれた作品群については、そのジプシー表象の方法において考えるべき点が多いので、また別の機会に論じてみたいと思う。また、ジョージ・エリオットの『スペインのジプシー』についても同様である。

Chicago P, 1995.

- 天野みゆき、『ジョージ・エリオットと言語・イメージ・対話』（東京：南雲堂・2004年）.
イアン・ハンコック、『ジプシー差別の歴史と構造』，水谷驍訳（東京：彩流社・2005年）.
川本静子、『G.エリオットー他者との絆を求めて』（東京：冬樹社・1980年）.
木内信敬、『青空と草原の民族－変貌するジプシー』（東京：白水社・1980年）
ジュディス・オークリー、『旅するジプシーの人類学』，木内信敬訳（東京：晶文社・1986年）
セルバンテス、『模範小説集』，牛島信明訳（東京：国書刊行会・1993年）.
富山太佳夫，「ドロシーの呪い」，『ジェイン・オースティン研究』第1号（日本オースティン協会・2007年）109-114.
水谷驍，『ジプシー－歴史・社会・文化』（東京：平凡社ライブラリー，2006年）.

〔本論文は，2007年11月24日に中央大学多摩キャンパスにおいて行われた日本ジョージ・エリオット協会第11回大会のシンポジウム『「スペインのジプシー」を読む』において発表した「イギリス文学におけるジプシー表象－ジェイン・オースティンとジョージ・エリオットを中心に」を大幅に加筆・修正したものである。また，加筆・修正に当たっては，2006年度松山大学総合研究所特別研究助成を受けたことを記して感謝の意を表したい。〕